



大江健三郎ノート 第1回・第1章 一九五四年の転向

梶尾, 文武

(Citation)

文学+, 1:88-108

(Issue Date)

2018-10-01

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009466>



一九五四年の転向

梶尾文武

1 新しい転向小説——「奇妙な仕事」

大江健三郎は第一作品集『死者の奢り』（文藝春秋新社、58・3）の「後記」において、次のように記している。

僕はこれらの作品を一九五七年のほぼ後半に書きました。監禁されている状態、閉ざされた壁のなかに生きる状態を考へることが、一貫した僕の主題でした。秋のおわりまで、僕の日常はフランス語の勉強に比重が大きくおかれていて、小説については amateur にすぎませんが、やがて逆に、小説のなかの主題が僕を拘束しはじめ、僕はその結果、悪い学生にかわりました。

周知のとおり、東京大学在学中に学生作家として出発した大江健三郎の初期作品は、「監禁されている状態」あるいは「閉ざされた壁のなかに生きる状態」というモチーフを反復的に導入した。一連の作品に形を変えながら描かれた監禁状態は、相対的安定期を迎えた一方で閉塞感に覆われた昭和三十年代の日本社会、そしてそこに生きる青年一般の心性を寓意するものとして捉えられている。亀井秀雄は「状況論的な発想」に基づく大江の初期作品について、「ある集合的な存在の状況と心情を代表するものと意味づけられてゆく」と指摘するが（1）、作家みずから右のような自作解説を通して、監禁状態におかれた作中の青年たちを世代的「代表」として捉えるような解釈を強く誘導してきた。

大江が『死者の奢り』所収の作品群を著した一九五七年は、本郷仏文科に進んだ二年目にあたる。デビュー作と目されるのは、東

京大五月祭賞を受賞した「奇妙な仕事」(『東京大学新聞』57・5・22「死者の審り」前掲)である。大学生の「僕」は、私大生、女子大生とともに、大学病院が募集する犬殺しのアルバイトを引き受ける。「僕の疲れは日常的だったし、犬殺しの卑劣さに対しても怒りはふくれあがらなかった。怒りは育ちかけ、すぐ萎えた」と「僕」は語る、「僕は友人たちの学生運動に参加することができなかった。それは政治に興味を持たないこともあるが、結局、持続的な怒りを僕が持ちえなくなっているせいだった」と。「僕」が汚辱にまみれたこの仕事に囚われる理由は、「怒り」を持続しえず、そのため同時代の学生運動にコミットしえなかったことの無力感と結びつけられている。「僕」は学生運動に無関心な人となるノンポリでも体制派でもない。むしろ運動から離脱していることに過剰に拘泥する「僕」の自己意識は、転向者のそれとして捉えるべきである。ひしめき合う一五〇匹の犬たちに見つめられ、「三百の脂色の曇りのある犬の眼に映っている三百の僕の小さいイマージュ」を想像した「僕」は、「小さい身震い」を感じながら、それらの犬が互いに似かよっていることに気づく。

どこが似ているのだろうな、と僕は思った。全部、けちな雑種で瘦せているというところか。杭につながれて敵意をすっかりなくしているというところか。きつとそうだろうな。僕らだつてそういうことになるかもしれないぞ。すっかり敵意をなくし

て無気力につながれている、互いに似かよって、個性をなくした、あいまいな僕ら、僕ら日本の学生。

大江の作品世界にあって、主人公が「敵意」なるものを恢復し「無気力」な日常性を脱するに至るまでには「セヴンティーン」(『文学界』61・1)を待たねばならない(これについては次回以降に検討する)。右の場面を捉えて、野口武彦は「言語に分節される以前のふつりは恐怖とか絶望とか空腹とかをあらわす吠え声をも抑止して無気力を沈黙のなかに訴求している何ものかについて、主人公は自分の立場からの類推をこころみる」と解釈するが(2)、犬たちの言葉なき沈黙から「僕」が導いた類推とは、ほかでもなく彼自身が「そういうことになるかもしれない」という予感である。杭に繋がれた無力な犬たち、差異を奪われ均質化された犬たちと向き合った「僕」は、おのれ自身が人間であることを止め、動物的な何ものかに変貌することを予感する。

だが、それにもまして重要なのは、そのような「僕」の予感が「僕」ひとりのものであることを超えて、「僕ら日本の学生」がおしなべて共有する意識として一般化されていることである。大江作品に関してしばしば指摘されるアレゴリーとしての性格は、「私大生」「女子大生」という作中人物の呼称がすでにそうであるように、一般的なもののへの過剰な指示に由来している(3)。

私大生は蹲みこみ眼をふせて暗い声でいった。僕はあの犬たちが低い壁に囲まれてじっとしていると考えるとやり切れないんだ。僕は壁の向うを見ることが出来る。あいつたちには見えない。そしてあいつたちは殺されるのを待っているんだ。

壁に囲まれた犬たちが閉ざされたままであるのに対し、「僕ら」はその向うを見ることが出来る。私大生はこのように「僕ら」と「あいつたち」とを差別化するが、実はその境界は脆いものでしかない。「僕ら」もまたいつか「そういつか」ことになるかもしれない存在だからである。私大生はこのとき、「壁」の内側に監禁された人間性の零度とでもいうべき動物的存在に彼ら自身が変貌することへの不安に駆られている。私大生が吐露するそのやり切れなさは、彼ひとりだけのものではなく、彼個人の発話としてカッコに括弧することができないような「僕ら」の意識として呈示されている（「奇妙な仕事」においては、全篇にわたって会話を地の文から区切るカッコが用いられていない）。

「奇妙な仕事」の作者の文壇デビューをお膳立てしたのは、主に「近代文学」派の批評家たちであった。彼らが昭和十年前後における転向問題を主要な関心事とし、戦後コミュニティズムに対しては肯定否定相半ばする（平野謙のいわゆる「中途半端」な）態度をとったことは、周知のとおりである。五月祭賞の詮衡委員を務めた荒正人は、本作が「現代の最も若い世代の、やや虚無的な心情をつかみ

だし、それをひとつの事件としてまとめあげた」ことに賛辞を送り（4）、平野謙は「壁に囲まれ、杭にながれながら、尾をふつて与えられる餌をおとなしく食わねばならぬ」その主人公が「占領下の日本の全人民のシンボル」たりえていると評価した（5）。彼らがいずれも本作の可能性の中心として肯定したのは、そこに描かれた、革命運動から撤退する戦後青年の虚無感にほかならない。作者大江自身もそうした評価に呼応するかのようになり、五月祭賞の「受賞の言葉」（『東京大学新聞』前掲）において次のように述べている。

昨日、全学連の指令したストライキがあった。僕は現実的にその成果と害を検討する立場に今はいない。しかし東大の文学部の学生が出したピラの文章の非論理性と不正確な事実の伝え方には僕は承服できない。また、一部の学生たちの討論の仕方、煽動的な無責任さに僕は承服できない。

折しも砂川闘争が盛り上がるなか、同時代の学生運動は、六全協以降の停滞を脱し再び高揚の兆しを見せてつつあった。しかし大江はそれに背を向け、「非論理と煽動にみちた卑劣な文章があふれ、理解しあうための討論があふりたてる演説にすりかえられたあと、その後にくるものは何か」と、全学連が牽引する学生運動が「論理性」を欠いていることに不信を表明した。この「受賞の言葉」

は、「奇妙な仕事」の本文と同じ紙面に掲載されている。「奇妙な仕事」は言ってみれば、戦後革命運動からの撤退のあとに来るべき新しい転向小説として受け止められた作品である。そう読まれることを、作者もパラテキストを通じて促している。そのような解釈は、作品における人称の配置、つまり「僕」から「僕ら」への転位によってより強くコード化されている。本作は、同時代の転向青年の虚無感を代表する作品たらしとする意志のもとに、「僕」ひとりではなく「僕ら日本の青年」一般を語っているのである。

大江の小説におけるこのような主語の拡張、すなわち「僕」という個体から「僕ら」という一般的なものへの転位は、作品世界に監禁状態という状況を設定したとと相関している。大江の初期作品は、作中人物の動物的な監禁状態を、戦後青年一般の停滞感の表現として受け取らせる。一連の作品は、そのような解釈のコードを作品それ自体とパラテキストとを通してみずから措定し、そのコードに深く準拠しているからである。村上克尚は、大江作品に出現する「動物」を人間の生存形態の比喩として読むような「アレゴリーの読解」を人間中心主義的な举措として斥けるが(6)、それでは作品に敷設された如上の解釈コードを取り逃がしかねないだろう。それは初期大江作品における政治性を読み落とすことに等しい。監禁状態を「日本の青年」のアレゴリーとして読むコードを無批判に受け入れるのでも、また倫理的に棄却するのでもなく、むしろその結末の過程と機序が問い直されるべきである。大

江の初期作品を強く規定する、作中人物の監禁状態を日本の青年一般の閉塞状況を表現したものととして読ませるコードは、いかにして見出されたのか。この問いに接近するためには、改めてなぜ「監禁」なのかを検証されなければならない。

2 死者への責任——「火山」

大江健三郎における学生運動に対してのデータチメントは、一九五五年の六全協、翌年のスターリン批判と続く、日本共産党の権威失墜に起因するものとして理解されてきた。なるほど、左翼運動に参加した同世代の多くの青年にとって、五五年以降の党の動向が運動から離脱する契機となったことは事実である。その帰趨を描出した作品の代表としては、柴田翔の『されど、われらが日々——』(文藝春秋新社、64・8)が挙げられよう。しかし、こと大江に関しては、五五年〃六全協を分岐点とする理解は正確ではない。大学に入学してまもない五四年から、全学連ラディカリストに対する大江の不信はすでに始まっていたからである(大江における五四年の転向問題を正面から論じた先行論は、管見の限り見当たらないが、そのプライオリティが自分にあると主張する趣味はない)。

五八年春、大江はエッセイ「僕のなかの駒場」を『東京大学新聞』(58・3・19、26)に寄せ、入学当初を回想して次のように述べている。

われわれはなかなかこない春を、冷えびえした廊下や、地下道、高い木立とえたいのしれない雑草の生えた運動場で忍耐強く待っていた。正門の前のいささかの花々、そして永い雨を吸って黒っぽい樹皮。

われわれは掲示板に、共産党の細胞が貼った声明を群がって読んだ。そこには女子大生の不思議な自殺が、それよりもなお不思議な文章で書かれていた。

入学したにもかかわらず「なかなかこない春」は、五四年四月から大江がすでに抱え込んでいた陰鬱な気分と見合っている。共産党の細胞が書いた声明文を「不思議な文章」として受け止めたと述べるとき、示唆されているのは、すでに大江が党の運動へのシンパシーを持ち合わせてはいなかったということにほかならない。その声明文は、「女子大生の不思議な自殺」を告げるものであったという。大江はそれ以上のことを説明しようとはしないが、何が起ったのか。

翌五年九月、大江は、東大教養学部が刊行していた雑誌『学園』に「火山」と題する短篇小説を発表していた。右に示唆される「女子大生の不思議な自殺」を扱った小説である。「奇妙な仕事」発表の約二年前、大江にとって初めての活字化作品となった本作は、学生会主催による第一回銀杏並木文学賞を受賞している。のちに大江は「火山」の発表を振り返って「ミス・プリントは五べ

ージに四十個もあって、ぼくの生涯のはじめての小説家の喜びはすっかり台無しにされてしまった」と述べ、怒りのあまり同時期に著していた長篇小説を「いま俳優をしている友人」つまりは伊丹十三に「見せただけで焼きすててしまった」ことを明らかにしているが（こ）、確かに『学園』掲載の本文には夥しい誤植が見られる（本稿ではそのまま引用する）。単行本未収録の作品である。

「奇妙な仕事」に登場する女子学生は、「私はね、ペイをもらつたら火山を見に行くわ」と語っていた。「火山」に登場する「僕」もまた、火山を見に行くこと、つまり閉塞した日常の外に出ることをかねがね切望してきた学生である。物語は「僕」がS火山に向いたところから生起する現在の出来事と、彼の従妹のL子の自殺を端緒に想起される過去の出来事とを交錯させながら展開する。L子は、「ユマニスト党」の黨員として革命運動に関わり、「農村工作」にも身を投じた女学生であった。

L子の死体がベッドに置かれている部屋に入ると女学生や教師に囲まれて学生服の男が声を挙げて泣いていた。L子の恋人のYだなと僕は思った。涙で醜い眼を僕にむけてYはすぐ視線をそらせた。卑屈な額をしているからYさんがくどくど頼みこむのを聞いていると断わるのが嫌になる、どうにでもなると良い、とそんな気になるとL子はいつていたものだった。

自殺したL子との面会に訪れた「僕」は、彼女の死体を取り囲む人々すべてに何かしら醜悪なものを見出すにはおれない。「論理的な判断力がないし護身の本能がむきだしだった」というのが、かねてからの「僕」のL子に関する人物評である。一方「涙で醜い眼」と「卑屈な額」を持ったYは、L子の死体の前で「僕にはL子さんの死に対してどんな責任もない」と弁明し醜態を晒す。L子の友人である女学生Nは、彼の「卑怯」さを糾弾するが、「僕」は「彼女達は疲れきつていて美しくない」と感じていた。こうして「僕」にとつてはいずれも与しがたい二人が口論を始めると、中年の教授はそれを仲裁しようとして語りかける。

——君達、もうそんないい合いは止せ、君達が互いに変わった仕方ではあるがL子さんを愛していてL子さんの死を心から悼み哀しんでいるのはよくわかる。L子さんは誠実に苦しんで死んだのだから、君達も誠実な哀悼という場で手を握り合いたまえ。私は君達の若い誠実に感動する。

中年の教授のこの言葉に、Yと女学生が沈黙のうちに「痛々しく見える微笑」を浮かべるのを「私」は見逃さない。馴れ合う三者を傍観しつつ、「僕」は「なんとという卑しい妥協をするのだから」と、L子の死に対する彼らの「誠実な哀悼」に不信感を募らせる。教授のいわゆる「誠実な哀悼」とは、L子のほとんど無意

味な死をさきも意味ありげなものとして横領し、彼女の死に対しておのれ自身を免責する自己欺瞞だからである。「それぞれ般にとじこもつて、こわばつた顔をうかがいあつている人達は高貴な革命的感情にみちているらしくYは痛ましげに微笑しているようである」。この「高貴な革命的感情」は、自己欺瞞の上に成り立っている。

興味深いのは、学生運動にコミットするL子を支えていたのも、このような自己欺瞞としての「誠実」にほかならなかつたことを、「僕」がすでに知っていることである。かつて「僕」はL子と「ユマニスト党の主催したP式平和大会」に同行したが、そこで打ち立てられた「新綱領」は、「論理的な内容を持つているとは思えなかつた」。学生たちが合唱する広い会場の外に出ると、「L子は意外に暗い声で僕にいつた」。

——私は合唱しているながら周りの人達にひどく嫌悪を感じるこがあるわ。世界の友よ手をつなげ、と主催者が叫ぶと、さつと皆が握手しあつたりするでしょう。そんな時私はこんな愚かしい人達もみんな誠実なのだからその誠実さを通じて認めなければならぬ。軽蔑なんかしてはならない、と思うの。けれども、皆誠実さなどはこれつぼちも持たないで唯狭量で、狭くて愚かしいだけかもしれない、と思うと心がさつと冷たくなるのを感じるこがあるわ。

「僕」がL子を侮蔑するように、L子もまた運動にコミットする学生たちを「愚かしい人達」として内心では侮蔑している。しかし彼ら学生たちが「誠実」であることを信じるならば、彼女もまたそれに応じるべく「誠実」でなければならぬ。この「誠実」は欺瞞的なものである。柘植光彦は、「偽善的な平和運動やサークル活動の「愚かしさ」をある程度知っていないながら、しかもそこに身を捧げてゆく」L子に、「自己欺瞞を故意に自己に課し、自己の想像によって現実を認識しようとする態度」を見出し、これが「のちの大江健三郎の社会参加におけるタテマエとしての態度に、きわめてよく似かよっている」と指摘する(8)。後年の大江自身の動向については措くとして(柘植の指摘は的を射ていると思う)、「火山」がL子と「僕」との対照を通じて呈示するのは、運動にコミットしようとする者は自己欺瞞的であることを免れないという認識、逆に自己欺瞞を免れ「論理的」たらんとする者は運動にコミットすることができないという認識である。

「僕」はS火山に向向いたものの、火山は人工的な噴火実験を行なうという外国人兵団によって占拠され、立入禁止となっていた。鉱山技師によれば、核物質と思しき「様々な驚くべき可能性を胎んだ質量数の極めて大きい鉱物」の調査が目的だという。農民たちは抵抗し、山頂に足を踏み入れようとする。山下肇は、本作では「火山の幻想的なメルヒェン風な神秘さ」が「基地と原爆の魔

力の寓話」に置き換えかえられていると指摘するが(9)、S火山をめぐる外国人兵団と農民たちの争いは、本作発表当時から激化しつつあった砂川闘争を、人工的な噴火実験は核実験——前年には第五福竜丸事件が起きている——を、たしかに想起させる。「火山」はすでに、のちの大江作品がそうであるように、同時代日本の状況のアレゴリーとして読まれうる作品である。

外国人の占領に抵抗する農民たちを、「僕」はただ傍観することしかできない。「僕らは何の關係もないんですからね、この人達とは」とうそぶく「僕」は、火山を離れてゆく。そのとき「僕」の記憶に回帰してくるのが、五週間前、警官に羽交い絞めにされ「ユマニスト党に関する書類」を押収されたL子の姿である。噴火が実際に起こるなかで、「僕」は火葬されるL子を想像する。

僕はL子の火葬が今夜行なわれる筈だったのを思いだした。L子を焼く火の色は今S火山の頂上を海の荒れるように波だたせている噴火の炎に似てはいないだろうか、それにしても僕はL子に対して始終、傍観的だった、と僕は激しく悔いの気持ちにおそわれながら思った。最も根本的な場所では僕こそL子の死の責任を負わなくてはならないのではないか。

L子の死に対して「僕」が「責任」を負うとは、どういうことか。それは中年の教授が呼びかけるように「誠実な哀悼」に浸る

ことでも、L子自身のように運動に参加することでもない。「僕」がそのような自己欺瞞から免れたいとすれば、それはあくまでも傍観者でしかありえないことの「悔いの気持」を引き受け続けているからである。悔恨は消去されることなく反復される。書くという行為、この「最も根本的な場所」においてである。こうして小説を書く行為は大江において、傍観者であることの疚しくも自己否定的な意識の下、死者に対する応答として始まったのである。

3 「三・一四事件」とお茶大学生自治委員長の自殺

先に名を挙げた山下肇は、東大教養学部の名物教官として知られた進歩派の独文学者である。銀杏並木文学賞の詮衡委員として「火山」を選んだひとり、山下である(委員長は中島健蔵)。当時は助教だった(このことは覚えておいていただきたい)山下は、「大学の青春・駒場」(9)を著し、四九年の新制東京大学設立から当時までの駒場における大学自治の動向を記録している。五二年の東大ポロ事件以来、矢内原忠雄総長をはじめとする東大の教官の間では、レッドバードにもない大学自治への介入を強める警察権力に対しての抵抗があった。山下はそうした「良心的」教官の筆頭である。裏表紙に付された著者紹介文によれば、山下は「東大セツルメント、わだつみ会、文学研究会、演劇研究会などの指導教官をひきうけているほか、学生のたのみには、いやとは言え

ない世話役教授、学生の兄貴のような存在」であったという。「わだつみ会」こと日本戦没学生記念会の設立に携わった山下は、その第二次結成(五九年)に際しては事務局長を務めた。

山下は「大学の青春・駒場」において、いまだ無名だった大江健三郎に言及し、「火山」の紹介に大きく紙幅を割いている。「応募作品の審査を依頼されて、原稿を読んでいくにつれて、ぼくは胸をつかれずにはいられなかった」という山下は、作中に登場するL子のモデルについて明らかにしている。山下がよく知るその人物、遠藤和子は、一九五三年春からお茶の水女子大学の自治会委員長を務めたが、翌五四年秋に自殺した学生運動家であった。

山下は「火山」を読み進めるうちに「従妹L子とは、ひよっとすると、遠藤さんのことを言っているのではないのだろうか」と勘づき、L子の自殺を遠藤のそれと重ね合わせたという。

大江が五四年に駒場キャンパスの掲示板で見たという、共産党細胞による「女子大生の不思議な自殺」についての声明文は、遠藤和子の死を告げるものであったと推測されよう。大江が「不思議な文章」と呼ぶことの含意からして、そこにはおそらく、共産党が彼女の死に関係していないことも併記されていたと思われる。さらに言えば、大江はすでに「火山」執筆の段階で、自治会シンパとして名高い「人気教官」山下と遠藤和子との関係を伝え聞いていたとも考えられる。大江は賞の詮衡委員である山下に宛てて「火山」を書いたのではないか。「火山」に登場する「中年の教授」

は、実は山下をモデルとしているのではないか。当時の山下の言辭にみえざる「誠実」さは、そのことを裏付けるに足る(10)。

さらに注目されるのは、山下肇が、遠藤和子の死の背景に一九五四年のいわゆる「三・二四事件」を見出ししている点である。この事件以来、「学生が急に騒がなくなりました」と、遠藤さんの自殺とが何か深いつながりがあるように思えてならなかった」というのが、山下の見立てである。遠藤の自殺のおよそ半年前に「起ったこの事件については、『大学の青春・駒場』から山下の記述を引用しよう。

この事件は、事件といっても、なんのことをさしたらよいかわからないのである。警官に襲撃されるような事件がすでにあつたとは、ぼくには思われなかつたからである。要するに、ぼくの聞き知つたところでは、「山田某」という得体の知れない男(われわれが名前も知らないような短大の学生だとのこと)が、東大その他の学生たちから監禁暴行をうけたと称して警察に訴えた。これにもとずいて、警官隊は人権蹂躪の疑いで、大挙、駒場寮その他に捜査にきたものらしい。つまり、ユダの「駆けこみ訴え」がそもそも事件の発端であるようだ。

その後、学生間では、山田某といえは「スパイ」の代名詞としてとおっている。山田は都内の学生組織にはちよくちよく顔を出し、学生運動の中心的な学生たちの仲間然としてつきあつ

ていた男であつた。学生たちは、多少うさん臭いとは思つたものの、やはり大切な仲間とおもつて、相談にのつたり、金を貸したりもしたらしい。そういうばあい、学生諸君は、人間をみる目がまだじつに甘い、とつくづく思う。(略)

警官隊は、逮捕しない(逮捕状をもつていない)ことを条件に寮内の教室を搜索し、いくらかの「証拠物件」を押収していったとのことである。しかも、引きあげるようにみせて、いきなり逮捕状を執行し、都学連の委員長をしていた活動家の大谷君が逮捕された。駒場寮のほか、相前後して数カ所が急襲された結果、あわせて東大生三名が逮捕され、それはいずれも「全学連」系自治会活動の先頭に立つ人びとだつた。

ところが、そのときいっそう明らかになつたことは、逮捕状が、この三人ばかりでなく、じつは十数名にたいして発せられていることであつた。むろん「山田某」の申し立てにもとずいてのことだつたらうが、その十数名は、いわば「全学連」の主力をなす活動家と目される人びとばかりで、これによって学生運動はいっきよに支柱を失い、つぶれ去るかとおもわれた。なかにはお茶の水女子大学の学生まではいつていた。はたして女子学生までが「リンチ」に加わつたのだつたらうか。とにかく、逮捕された三名いがいの学生たちは、そこでいっせいにもぐつた。地上の人ではなくつたのである。それから、地上では、逮捕された三人の裁判が進行していった。(略)

この全体をひくくるめて、学生間では「三・一四事件」と呼ばれている。ここでいわれている「事件」とは、逮捕の理由になつた刑事事件そのものではなく、「スパイ」の山田某が「でっちあげた」リンチ事件によつて、駒場寮その他を警官隊が急襲し、学生運動の中心的存在、すなわち「危険人物」と「山田某」が判断した（とおもわれる）十数名の学生を一網打尽にしようとし、そのうち三名が逮捕され、他は地下に潜つたといわれるべきことを意味しているものよりだ。（11）

山下が差別意識を露わにして右に書くところの「われわれが名前も知らないような短大」は国際短期大学、「山田某」は山田初市という（12）。長くなつたが、山下が述べるところの要点は二つである。第一に、東大生に監禁されたとして、警察に駆け込んだ山田という贖学生の訴えは嘘であり、実際には監禁暴行事件など存在しなかつたということ。第二に、山田は全学連の情報を外部に漏洩するスパイだつたということである。ただし山下は「でっちあげた」および「スパイ」という二語にカッコを付し、それが事実であるか否かについては巧妙に判断を留保している。「大学の青春・駒場」が刊行された当時は、この事件についてはいまだ裁判の係争中であつた。のちに山田の証言は信憑性を欠くとして斥けられ、全学連の運動家たちの無罪によつて結審している。

逮捕された東大生とは、武藤一羊・吉川勇一・大谷喜平次の三

名である（13）。五〇年のコミンフォルム批判以来、共産党内が国際派と所感派に分裂するなかで、当時の全学連主流派は所感派との結びつきを強めていた。なかでも有力な指導者だつた武藤一羊は、五〇年代前半の運動を振り返って「私自身は一九五〇年十月の試験ポイコットのあと直線的にするどい行動の連続を叫びつつける国際派への反撥から、泥臭い主流派の価値観をうけいれていき、五一年には自分もそれに属するようになる」と述べ、五二年から五四年にかけて、山村工作隊に関与した時期の全学連を「にがり、苦渋にみち、傷だらけの、遅すぎた日本ナロードニズム」として規定している（14）。私の見た限りでは、武藤は三・一四事件については言及を避けているようである（この点、さらに調査を要する）。

右に引用した『大学の青春・駒場』に戻ろう。東大教官・山下肇のこの記述は、実は虚偽を含んでいる。砂川闘争以来、全学連の指導的立場に立つた森田実の証言が傾聴に値しよう（戦後左翼の秘密「潮文社」、80・9）。森田は監禁には関与していない（と本人は述べている）が、山田初市を東大本郷キャンパスの三四郎池付近で共産党の中核自衛隊に引き渡した張本人である。森田はそのことを明かしつつこの事件を「山田リンチ事件」と呼び、次のように証言している。

しかし東大駒場寮は六人が一部屋で共同生活をしていきますか

ら、あまり長期間不自然な監禁が続くと問題が起こります。この種のことは秘密が大切です。まわりから疑われないように細心の注意が必要です。このため、彼は東京工大の寮などをたらい回しにされたのです。その間彼はいつも行動隊によって監視されてきました。縛り上げられたり、暴行されたり、おどされたり——というような毎日だったようです。

査問する側は、山田自身の口から「自分は警察のスパイでした。警察の誰々から金をもらって、スパイ活動をやりました」というような自白をとりたかったのです。それで、脅したり、締め上げたりしたのですが、結局、自白らしい自白は取れなかつたようです。あるいは山田は何も関係なかつたのかもしれない。私には当時からそんな疑問もありました。(15)

山下の記述に反して、森田の証言によれば、全学連学生が山田を寮に監禁し暴行を加えたという事件は、捏造ではなく事実である。また、山田は実際にはスパイなどではなかつた可能性が高いという。そのことについては、事件に際して逮捕されたひとりである吉川勇一ものちに認めている(「市民運動の宿題」思想の科学社、91・9)。吉川は当時すでに東大を除籍となっており、山下肇らが牽引する「わだつみ会」の専従として平和運動にコミットしていた。「正直言って、この実際の事件の全貌は、かかわったとされた私も知らない」とした上で、吉川は次のように述べている。

裁判の中で、私たちは、事実を究明するのではなく、無罪判決を目標とした。日本共産党と、学生運動の利益を守ることが何にもまして優先し、そして、それは結果的に、私自身の個人的利益(有罪を免れる)とまったく合致した。私たちはY(山田初市)がスパイであるかどうかではなく、Yの証言がまったく信用のおけぬものであることをひたすら立証することに全力をあげた。

もしかするとYがスパイでないかも知れないという疑いをかかり感じていたのだが、それを口にするにはできなかった。その結論することは、運動の利益にとってまったく反していると思えた、あるいは思おうとした。痛恨事である。(16)

吉川はここで、事件の裁判に際して無罪判決を得るために偽証を行なったことを示唆している。その偽証には、逮捕された学生個人の利益よりも「運動の利益を守るという大義名分があった。なお、逮捕学生と近しかった東大教官の山下肇が法廷で証言を行なったかどうかは、詳らかではない(この点も今後要調査)。

さて、五四年に東大駒場寮を主な舞台として起こったこの監禁事件およびその裁判と、先に述べたお茶大学生自治会委員長の自殺には、どのような関係があったのか。「大学の青春・駒場」の山下肇は遠藤和子について、「彼女は「三・一四」で逮捕された元「全

「学連」の書記長石塚君の恋人であったという」と記すが、遠藤を慮ったのか、これも事実に戻す。お茶大自治会の活動を通じて遠藤をよく知る後輩・岡百合子の証言によれば、遠藤の恋人は武藤一羊であった。同じく遠藤の後輩・杉内蘭子は、遠藤の自殺の動機について「武藤さんの方から、バートナーの活動に対する指導・圧力があって、そういうのを苦にして自殺されたんじゃないか」と推測している(17)。この証言を踏まえて言えば、大江が「火山」においてYという人物のモデルとしたのは、武藤一羊である(武藤は吉川とともに、「平連」を牽引する市民運動家として脚光を浴びることになるが、今は置く)。

武藤は五四年当時、すでに東大を退学し全学連中央執行委員として中央機関紙『祖国と学問のために』の編集長を務めていた。三・一四事件に連座して大谷喜平次・吉川勇一とともに逮捕された運動家である。武藤の恋人だった遠藤が、山田の監禁暴行に直接関与したかどうかは定かではない。遠藤の後任としてお茶大自治委員長を務めた永島(石川)徳子は、三・一四事件に際してのお茶大自治会の動向について、次のように回想している。

一九五四年度も遠藤さんは自治会委員長を続けた。ところが、四月早々、「お茶大の」二人の学生に逮捕令状が出されるといふ事件が起こった。一人は逮捕されたが間もなく釈放された。他の一人は逮捕に応じず、潜行して身を隠した。大学側は教育上

の立場から釈放方を陳情した。結局、他の大学で起きた事件(三・一四事件)との係わりで起きたことで何事もなかったのだが、潜行した学生は一年後の三月十五日にやっと学園復帰となった。(18)

永島の証言によれば、遠藤自身は監禁事件の発覚に際して逮捕されてはいないが、お茶大自治会としての事件対応に苦慮し、この年は例年開かれる学生大会が開かれなかったという。自殺したのは事件発覚のおよそ半年後、五四年九月一日のことだった。永島は「たった一人の女子学生の死が学生運動に大きな打撃を与えることがあるかも知れない。現に彼女が交際していた男子学生は学生運動の中で重要な立場にある人だった」と述べるが、五四年における武藤らの逮捕と遠藤の死は、学生運動が停滞期を迎える大きな要因となった。また、吉川と武藤は同年三月一日の第五福竜丸事件を機に、すでに学生運動から原水禁運動へと軸足を移しつつあった。

大江健三郎が東京大学に入学したのは、五四年四月である。このことは重要である。というのも、大江は五五年〓六全協を機に学生運動から撤退したのではなく、運動にコミットする手前どころで転向者の無力感を内面化したと考えられるからである。卒業時に著した「僕のなかの駒場」(前掲)において、大江は「女子大生の不思議な自殺」について述べていたが、そこにはさらに次

のような記述が読まれる。

私は二十九年に駒場へ入学したのだが、それは奇妙な年だった。駒場には不思議な静寂と無気力があつた。その三月に、警官隊が駒場にやってきて搜索したというのを、私も私の仲間たちも知らなかった。私は、運動場に大きい輪をつくって、短かくそりかえつた鼻や乾いた唇をもつた女子大生と、長い時間フォーク・ダンスをしているうちに、あさぎいろの空にひろがつた夕暮を思い出す。そして、その間、春の搜索のあと逮捕された学生が、彼らの思想的な母胎である政党からふいに背をむけられ、苦しく孤独な戦いを続けていたのだと思うと、私にはあれらの日常がまったく奇妙だと考えられてくるのだ。

大江は入学当初から「三・一四事件」を知っていたわけではないようだが、当時の駒場を領していた「不思議な静寂と無気力さ」の一因が、この事件にあるとのちに認識するようになったと見られる。このエッセイでは、大江は逮捕された学生運動家たちの動向を「苦しく孤独な戦い」と呼び、それに共感する態度を示している。

大江は右のエッセイを著した数か月前、「三・一四事件」をモデルとした小説を発表している。「偽証の時」(『文学界』57・10↓「死者の誓り」前掲)である。「奇妙な仕事」の発表からまもない時期に

著された短篇だが、文庫収録作には選ばれておらず、作品のモデルについては大江が語るところではない。「実際とは経過も結末もかなり違ったものになっているが、小説の背景には、モデルといつていい似たような実際の事件があつた」とは、吉川勇一の指摘である。「偽証の時」と「三・一四事件」との関係については、事件の当事者である吉川が「大江氏が、その事件をどれほど詳しく知っていたのか、調べたのか、それは知らないが、しかし、作家としての大江氏の眼は、当時の学生運動のおかれていた状況と、その中間人間像をかなりリアルに描き出し、そして、それが抱えていた問題点、いまだに反権力の運動が解決し切っていない問題点を鋭く摘出していた」と認めているのである(19)。

4 死者の声——「偽証の時」

吉川勇一は「偽証の時」の発表当時、あえてこの作品に目を通すことを避けたという。「当時それを読んだ友人たちが「全学連を敵視した反動的な小説」だと口をきわめて批判していた」というのが、その理由である(20)。「偽証の時」は、あの山田をモデルとする「贗学生」の監禁事件の小説化を通じて、「T大」の学生運動家たちの正義に潜む欺瞞を批判的に剔抉する作品である(21)。篠原茂は本作を「傍観者としてではなく、内部批判者としての運動批判の立場で提出された作品」と位置づけるが(22)、この立場とはすなわち転向者の立場にほかならない。「偽証の時」は、同時代

の学生運動それ自体を対象化する点において、大江の初期作品群における転向小説の原型ともいえる一作である。具体的には後述するが、「奇妙な仕事」における犬と犬殺しのイメージは、「偽証の時」に直接的に描出された監禁事件を變形するところに得られていると見られよう。

本作の語り手である一人称「私」は、大江の初期作品にあっては例外的に、女子学生として設定されている。モデルとなった事件の前後関係に二つの作品を照らせば、「偽証の時」の語り手は、「火山」において自殺した女学生し子であると読むことができるだろう。つまり「火山」では十分には語られない彼女の自殺の動機は、「偽証の時」において彼女自身が語る監禁事件に求められるのではないか。「偽証の時」は、自殺した女子学生の声を通してこの監禁事件を復元しているのではないか。本作はこの死者の声を召喚することによって、「火山」において「僕」が示唆していた「責任」に応えるのである。

贖学生は監禁を主導しているのは、「歴史研究会」のリーダーにして「私」の恋人の丁大生、木田である。「私」から渡されたパンを「せかせか頭を振りたてながら」食いちぎる贖学生は、「監禁されていることが非常な苦しみであるように誇張し、私たちを嫌がらせる」。木田がそのパンを払い落とし、踏みじると、「私」は贖学生に掌を噛まれる。「奇妙な仕事」の「僕」が作品の結末近く、赤犬に噛まれたことを思い起こさせる挿話である。

贖学生は獣のように唸ると私の掌に激しく噛みついた。私は痛みに呻き声をあげた。

「よせ、よせつたら」と木田があわてて叫んだが贖学生はしつかり噛みついたままだつた。

私の掌に引きずられてあおむいた贖学生の顔は紅潮し、怒りにみちた眼が見ひらかれていた。私の視線の下で、それは静かに怒りを喪つて行き、その奥で何かぎこちないものが融けおちると、虚脱した曖昧な眼がかえつたきた。贖学生はのろのろ口を開き、私は血のしたたる右掌を左掌で支えた。血が激しくしつたり贖学生の首筋を汚し私のスカートを汚した。私は貧血し後じさつて壁に倚りかかると、木田が贖学生の頭を椅子の背にごつごつ打ちつけ、そのたびごとに贖学生が力なく呻くのを見ている。

木田は続けて「こいつは犬みたいに噛みつきやがつて」と憤るが、贖学生を喩える「獣のように」あるいは「犬みたいに」という比喩は、もはや比喩であることを超えている。贖学生の一瞬の「怒り」は持続することなくまもなく「虚脱」に転じてゆき、その「曖昧な眼」は、あの「三百の脂色の曇りのある犬の眼」と質を同じくしたものとなる。「奇妙な仕事」の「僕」は「杭につながれて敵意をすっかりなくしている」犬たちを前にして「僕らだってそ

ういうことになるかもしれないぞ」と思念していたが、贖学生は実際に監禁されてあることの虚脱感と無力さに落ち込み、動物的存在へと変貌するのである。監禁する学生たちも、その変貌への予感を共有している。

「あの男だつて、厭な疲れに身も世もないと思うわ。もしかしたら絶望しているかもしれない。汚れた動物みたいな顔してね」と私はいつた。絶望という言葉が、便所でうなだれて蹲みこみ真剣に排泄していた贖学生には決して結びつかない。それはしつくりしなくてぐらぐらする。私は小さく笑つた。

「あんなに汚くてちつぽけな男が絶望したところでどうということはないさ」と木田が私の笑いに反撥した激しさでいつた。「僕に問題なのはあの男を今後どうしようもないということなんだ」

急に私は外国人の講師がゼミナールの教室で叫んだ言葉を思い出していつた。「汚くて小つぽけな日本人が絶望している、どうということもない、というわけね」

「汚くて小つぽけな日本人が絶望している」と木田もいつた。「どうということもない」

木田と「私」との間で交わされる右の会話では、「絶望」する主体が、「汚くちつぽけな男」から「汚くて小つぽけな日本人」へと

拡大されている。木田は「どちらが監禁されているかわからないよ」とも口にするが、贖学生の汚辱にまみれた監禁状態とその「絶望」はひとり彼だけのもの、あるいは監禁し監禁される作中の青年たちだけのものでなく、「日本人」一般のものとして語られる。日本人を「汚くて小つぽけな」と評するのは「外国人の講師」であり、監禁する学生たちが内面化するレイシズムと呼ぶべきこの認識には、敗戦後日本の被占領が投影されている。「偽証の時」はこのようにして、監禁された贖学生を戦後日本人のアレゴリーとして読ませる解釈コードを指定するのである。

贖学生は、「私」と木田が「中途半端な愛撫」を交わしているうちに縄を噛みきり、寮から脱出してしまふ。二人は椅子や縄、尋問を記録した大学ノートといつた「《証拠》」を燃やし、歴史研究会のキャップ・安西の指令を受けて不在証明作りを画策する。木田はその不在証明作りを「ドイツ語の助教授」に頼むよう「私」に勧める。「君の出ている教室の担任は進歩的だし、馴れてるからうまくやってくれるさ」と。ところがまもなく、木田と安西は逮捕される。

かず多くの新聞がこの事件を大きくとりあげ、私はそれで逮捕されたのが木田と安西であることや、贖学生が強度の強迫神経症にかかつて入院したことなどを知つた。新聞では私たちの大学の教授たち、私の教室のドイツ語の助教授を含めて、殆ど

のいわゆる進歩的な教授たちが、この監禁事件をありなかつたと論じていた。そして、評論家たちの意見もほぼそれに同調して、強迫神経症の青年を信じている検察側をむしろ批判していた。私にはそれらの新聞記事がひどく空ざらしく感じられる。私には決して結びついて来ない。

この「進歩的」な「ドイツ語の助教授」のモデルは山下肇であり、本人もそのことを認めている。本作を時評で取り上げた山下は、「さしずめ私あたりをモデルに想定したかと思われる大学教師までが、学生の「偽証」に加担したごとくに虚構されている」と述べた上で、「実は、この作の中心となっている不法監禁事件が背負いこんだ苦悩は文学的主題としても、もっともつと深い今日的な問題を含んでおり、作者の幻想は真実を見通したかのごとき独善に落ちこんでしまつて、いきおい迫真力を失つている」と批判した(23)。

山下には先の『大学の青春・駒場』において、全学連シンプアの立場から、事件が含む「もっともつと深い今日的な問題」にすでに取り組んだという自負があったのだろう。しかし逮捕された学生たちの「苦悩」への、山下のごとき「誠実」な共感、本作の扱ふところではない。「私は学生の反逮捕運動には決して加わらず、むしろ興味さえもたないで自分だけの不安と孤独な闘いをしている自分を時には躰が震えるほど卑劣だと思ふのだが、だからとい

つて肩を組むことはできない」。平野謙は時評で「奇妙な仕事」に触れた際、「作者は「卑劣」という言葉に特別な意味をこめて、卑劣こそ現代の状況にたえてゆく唯一の道、とでもいいただけである」(24)と指摘していたが、「偽証の時」の主人公もまた、運動から離脱し「卑劣」であることに就くのである(大江は平野のこの評をのちの自作において活用したとも見られよう。自作に対する批評の我有化は、大江の得意とするところである)。

公判が始まると、「歴史学の助教授」をはじめとして、丁大の関係者は組織をあげて監禁事件の存在そのものをなかつたことになつたと偽証を繰り返す。木田は逮捕前、「学校の内側ではみんな僕らの噂でもちきりだ、ところが外部の人間が一人でも入つて来ると全部の臂がとじられてしまふ」と口にしていた。大学全体を覆う排他的な連帯は、「厚いぬつとりする膜」とも喩えられるが、それを正当化するのには、被害者意識と結びついた彼らの選良意識である。監禁に加わつた学生・原田が言うように、贖学生の言い分が仮に正しいとしても、「その正しさが優秀な学生二人をだめにしてしまうほど高価だとは思いません」という選良意識が、偽証を正当化する。「私」がこの欺瞞を免れえているとすれば、それはむしろ「加害者」であることを引き受け、そのことを忘れまいとするからである。他の女子大生が逮捕される現場を見た「私」はこう考へる、「逮捕されないで暗い苛立ちと卑劣な喜びにみたされている私は汚れた手を洗わない《加害者》なのだ。いつまでも《被

害者」にはなれない。そしてこんな厭らしい日常を苦しみながら耐えねばならない」と。

保釈された木田が「僕らがあの男を監禁する動機はないし、あの男がこの寮の一室に長い間監禁されることの可能性もまったくありえない。それでもなお、僕たちが有罪であると誰が信じよう」と語りかけると、集まった学生たちは「強い拍手と叫び」をもってそれを迎える。さらに安西が話しはじめようとしたとき、贗学生が母親に連れられて姿を現わす。医者により「強度の神経衰弱」と診断された息子を連れて、母親は「この子は、木田さんたちに監禁されたと嘘を申しました。この子をお許しください」と申し出る。

贗学生は木椅子に縛りつけられていた時と同じ、あきらめきつた、おどおどした表情ですすり泣き続ける母親の傍に立つていた。

「僕らはこの人を許してあげよう」と安西が激んでいる沈黙をかきたてるようにいつた。「加害者はこの人ではなかつたんだ。彼は僕らと同じように被害者だ。彼を僕たちの仲間にするけいれよう。僕たちは協力して、ほんとうの加害者、最も憎むべき加害者をつつげだして戦おう」

学生たちは安西の言葉に激しい拍手をかえし、部屋には充実した快活な感情が急速に盛りかえした。母親が贗学生を前に押

しだし、贗学生はためらいながら安西と握手しあつた。

安西が語るところの「ほんとうの加害者、最も憎むべき加害者」とは端的に、彼らを逮捕した国家権力の謂いであろう。革命という大義によって正当化された安西の言葉は、彼らT大の学生たちを贗学生と等しく「被害者」とすることによって、贗学生に対して彼らが「加害者」であつた事実を覆い隠す。いかにも尊大な安西の「許してあげよう」という呼びかけは、贗学生から言葉を奪い、彼を無力ならしめている。それはむろん欺瞞であり、彼が説く学生たちと贗学生との連帯は「熟練した馴合い」でしかありえない。学生たちを「快活な感情」へと導くこの欺瞞的な呼びかけに、「私」は馴致されえない。

つきあげてくる塊りが私の喉を膨れあがらせ、息をつまらせた。私は自分が青ざめてくるのを感じ部屋の外へ出たいと思つた。私は立ちあがつて拍手している学生たちの間をわけて廊下へ出ようとしたが汗ばんだ躰にはぬかえされる。私は怒りに揺さぶられた。

「私たちがその贗学生を監禁したことは事実です」と私はできるだけ冷静に声を押さえる努力をしながら叫んだ。「それを忘れてしまふことはできない。そんな卑劣なことではできない。私たちはその男を冬のあいだずっと監禁していた。それはだれも否

定できない。あれをなかつたのだと信じこむことができるはずはない。私はその男に掌を咬まれたんです。今でも血が流れるんです」

このとき「私」に声をあげさせた異和は、まず物質的な「つきあげてくる塊り」と表現され、遅れてその身体的な反応が「怒り」という感情として分節化される。学生たちからは立て続けに「良いぞ、検事」、「シベリア送り」、「自衛隊、強制入隊」といった揶揄が浴びせられ、「私は怒りに躰をしめつけられて再び叫びだしそうとし後から力強い掌に肩を押さえられて木椅子へ坐りこんだ」。しかし「私」のこの「怒り」は持続しない。小説は次のような一節をもって結ばれている。

深い疲れと屈辱が私の躰をみたした。臂を噛みしめてうなだれた私の周りに、黒ぐろした厚い粘膜が押しつけて来、疲れきつた私を吸いこもうとするのだが、それを耐えるためのわずかな努力さえ私にはひどく億劫に感じられる。私の肩には重い掌がじつとおかれたままで、その下の皮膚が新しく汗ばみはじめた。

一瞬「私」を突き上げた「怒り」は、まもなく「深い疲れと屈辱」にとつてかわる。この機微は、「私」の手を噛んだときの膺学

生のそれと——あるいは、「奇妙な仕事」における「僕」のそれと——同じである。右の叙述では、「粘膜」と「皮膚」という比喩が絡み合いながら「私」の屈伏を描出している。閉鎖的で欺瞞的な大学という空間は「黒ぐろした厚い粘膜」という隠喩によっていわば肉体的な形象を与えられ、「私」の屈伏はこの粘膜による吸収というイメージのもとに表現される。それとともにこの空間は、彼女の肩におかれた何者かの「重い掌」という換喩によって形象化されてもいる。膺学生に噛まれて血を流す彼女の「掌」とは対照的に力強い「重い掌」は、「私の肩」と同じ「皮膚」に癒着しつつあるかのようにある。つまり「新しく汗ばみはじめていた」という「皮膚」は、「私の肩」のものなのか、その上に置かれた「重い掌」のものであるのか、もはや識別ができない。このようにして「黒ぐろした厚い粘膜」と「重い掌」は「私」を吸い込み、組み寄せ、その存在をかき消してしまふ。

怒りの感情と抵抗の意志を奪われた「私」は、監禁されたあの膺学生の屈辱を分有している。しかしそれは、「僕たち」学生運動家たちのように、被害者である膺学生に同情すること、共感すること、あるいは同一化することとは全く異なっている。「私」はみずからが加害者であることを決して忘れようとはしないからである。それ自体が欺瞞である学生たちの連帯——この連帯は言うまでもなくホモソーシャルなものである——から零れ落ちた「私」が引き受ける屈辱は、加害者としてのそれである。彼女に固有な

この屈辱をおのれの存在条件とするとき、「私」は何者かの代表であることを止めている。この「私」は決して私たちではありえないのである。

他の多くの大江の初期作品がそうであるように、「偽証の時」もまた、作中の青年を「僕ら日本の青年」の代表として受け取らせるアレゴリーの回路を設定していた。しかし「私」という女子大生¹¹加害者はこれを逸脱している。実際この「私」は、前作「火山」に召喚されたときにはすでに自殺しており、その後の大江作品においても行き場を失っていると見える。亀井秀雄は本論のはじめに引用した一文のなかで、大江を「政治的・制度的には無権力の状態におかれた、その意味ではマイノリティであるほかにない」人びとを「いかに代弁しているか、という観点」のみにもとづいて評価する批評言説を批判するが⁽²⁵⁾、彼の作品そのものがそうした弱者¹²被害者の「代弁」へと傾斜していったことは否定しえない。そこでは、「偽証の時」に贖学生として登場したヴァルネラブルな被害者、犬のように監禁された動物的存在こそが、「僕ら日本の青年」あるいは「汚くて小つぼけな日本人」を代表する存在へと押し上げられることになるだろう。

一九六〇年、すでに職業小説家として出発していた大江は、再び五四年の監禁事件をモデルとした二つの作品を発表している。

「報復する青年」(「別冊文藝春秋」60・1、単行本未収録)と「後退青年

研究所」(「群像」60・3 ↓「孤独な青年の休暇」新潮社、60・5)である。この時期の大江は「われらの時代」(中央公論社、59・7)をはじめとして、停滞する時代の青年像を描出する試みを専らとしていた。大江作品に登場する青年たちにあつて、二作に再び現れた監禁された学生は、いわばその原像というべき存在である。青年の監禁状態を、比喩としてではなく文字通り体現しているからである。現にこの二作では、監禁事件の被害者こそが「青年」という一般名をもつて指呼される。彼らの屈辱が、この時代の後退青年¹³転向青年の屈辱として一般化されているのである。

「奇妙な仕事」の場合で言えば「僕」から「僕ら日本の青年」への転位、この主語の拡張を通じて、大江健三郎の初期作品は、動物的なものへの変貌を戦後転向青年一般の寓意として読ませる解「釈コード」を作中に結束する。だが、いまや明らかのように、これらの作品は、同時代の青年を寓意するために動物的な監禁状態を仮構したのではない。東京大学駒場寮を主な舞台として現実存在した監禁事件は、その直後に大学に入学した大江にとって、いわば革命運動の体験なき転向の契機となったと見られる。一連の作品に半ばオブセッションとして出現する、動物的存在へと変貌する青年のイメージは、五四年のこの政治的事件の被害者のイメージを原像とし、それを變形するところにはじめて得られている。

註

- (1) 亀井秀雄「解説」(『岩波書店編集部編』『戦後短篇小説選3』岩波書店、00・3、二九九頁)
- (2) 野口武彦「吠え声・叫び声・沈黙―大江文学における想像力の構造」(『吠え声・叫び声・沈黙―大江健三郎の世界』新潮社、71・4、二二一頁)
- (3) 柄谷行人は、大江作品におけるタイプ名の類用⇨固有名の排除、つまりその「アレゴリーの転移」を、むしろ一回的な「歴史」への固執として論じている(『大江健三郎のアレゴリー』『万延元年のフットボール』『終焉をめぐって』福武書店、90・5)
- (4) 荒正人「奇妙な仕事」を推す―五月祭賞選後評」(『東京大学新聞』57・5・22)
- (5) 平野謙「解説」(『大江健三郎』『大江健三郎全作品1』附録、新潮社、66・6)
- (6) 村上克尚「奇妙な仕事」―動物とファシズム」(『動物の声、他者の声―日本戦後文学の倫理』新曜社、17・9、一〇四―一二八頁)
- (7) 大江健三郎「持続せよ、持続せよ」(『われらの文学18大江健三郎』講談社、65・9)
- (8) 柘植光彦「火山」論」(『現代文学試論』至文堂、78・5、二二五頁)
- (9) 山下肇「大学の青春・駒場」光文社カッパ・ブックス、56・5、一三九頁。
- (10) 山下の「大学の青春・駒場」についての書評(匿名)「教師の誠実な心の記録」(『朝日新聞』56・5・27)では、「著者は二人の自殺した学生の痛ましい青春について、かなりのページを割いて書いている。そう
- した学生へのあたたかな思いやりにみちた数少ない教師の、これは誠実な「心の記録」といえよう」と書かれている。前年の「火山」が「大学の青春・駒場」に先んじて批判していたのは、こうした「誠実」の欺瞞性である。
- (11) 山下肇「大学の青春・駒場」注9、二三一―四頁、傍点は原文。
- (12) 山下肇のいわゆる「山田某」の所屬と実名については、「毎日新聞」(夕刊、54・5・26)に拠る。
- (13) 三月一日当日に逮捕されたのは、東京都立大生の和田武司(のちに中国文学者)とあわせて四名である。『毎日新聞』(夕刊、54・3・14)は「監視には時には女子学生もまじり、時間交代で延べ六十四名の学生が不寝番をするというような状態であった」と報じている。
- (14) 武藤一羊「全学連の思想」(『思想の科学』67・5)↓「主体と戦線―反戦と革命への詩論」67・12、合同出版、一七九―一八〇頁)
- (15) 森田実「戦後左翼の秘密」前掲、六九―七〇頁。
- (16) 吉川勇一「市民運動の宿題」前掲、七一頁、()は引用者補。
- (17) 引用は今西一「占領下お茶の水女子大学の学生運動―杉内蘭子・岡百合子に聞く」(『商学討究』小樽商科大学、10・7)における杉内と岡野の発言による。
- (18) 以下、引用は水島(石川)徳子「冬の旅―遠藤さんを偲んで」(『私の女高師・私のお茶大―一九五〇年代、学生運動のうねりの中で』東京女高師・お茶の水女子大学五〇年を記録する会、04・12)による。()は引用者補。
- (19) 吉川勇一「市民運動の宿題」前掲、六六頁。
- (20) 吉川勇一「市民運動の宿題」前掲、六五―六頁。
- (21) 「偽証の時」は増村保造によって「偽大学生」(大映、60・10)と

題して映画化されている。なお、同時期には大島渚が「日本の夜と霧」(松竹、60・10)において、六全協後の学生運動における監禁リンチ事件を描いている。

(22) 篠原茂「偽証の時」(全著作・年譜・文献完全ガイド 大江健三郎文学事典)森田出版、98・9、二八頁)

(23) 山下肇「新人の意欲作と独善」(東京タイムズ) 57・9・27)

(24) 平野謙「今月の小説ベスト3」(毎日新聞) 57・6・19)

(25) 亀井秀雄「解説」注1に同じ。

(この章終わり。次号第2章)